

中国の長距離巡航ミサイル

漢和防務評論 20151201 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国がシリアの IS を攻撃する可能性を技術的に検討した記事を紹介します。中国にとってシリア問題は” 核心利益 ” ではないため、攻撃に参加することはないと考えられます。しかし中国国内のイスラム問題は複雑、激化しています。攻撃を考えるとすれば、中距離弾道ミサイル、空中発射巡航ミサイル、海上発射巡航ミサイルがあります。

平可夫

漢和平可夫特集記事：

中国国内のイスラム系民族問題は相当複雑で、活動が激化しているが、シリア問題は、中国の ” 核心利益 ” ではなく、中国は IS に対する軍事攻撃に参加することはない。しかし参加する場合、中国は巡航ミサイル攻撃の能力はあるのだろうか？可能性のある攻撃方式は、以下の通りである：

一、弾道ミサイル攻撃。これは最も実行可能性が高い。DF21C/D 弾道ミサイルは、ミッドコースで衛星誘導を採用、終末段階でレーダー画像誘導を採用している。射程 3000 KM で精度は 50 M 以下である。新疆地区に配備されれば IS の戦略目標は攻撃可能である。当然 DF-26 を使うこともできる。新疆の最西地区はシリアのダマスカスから直線距離で 2800 KM である。ロシアと米国は、この種の攻撃が出来ない。INF 条約で全ての中距離弾道ミサイルを破棄してしまったからだ。

二、航空戦力方面。H-6K に搭載された CJ-10 型巡航ミサイルがある。一説には射程 1500 KM とも 2000 KM とも言われているが、H-6K が国境を超えて進出しなければ CJ-10 巡航ミサイルは届かない。

三、海上発射巡航ミサイル。052D 型ミサイル駆逐艦 (DDG) の作戦能力を見よう。ある説によると、052D は、通常の発射装置で垂直発射型 CJ-10 の配備を開始したという。将来は当然 CJ-10 を発射できる能力を保有するであろう。現在、すでに配備されたのかどうか、不明である。KDR の入手した情報によると、艦上発射型の CJ-10 はテスト中のようだ。

KDR は YJ-18 型多用途ミサイルの性能分析を行った。その結果、このミサイルはロシアの CLUB ミサイルファミリーのコピー製品であることが分かった。いわば、中国技術者は部分的に創造性を発揮したと言える。中国は、KILO-636 潜水艦を輸入すると同時に、潜水艦から発射する射程 220 KM、亜音速+終末超音速の対艦型 3M-54E ミサイルを獲得した。3M-14 は全行程亜音速であるが、輸出型の 3M-14E

と 3M-54E は同じターボジェットエンジンを使用している。水上艦から発射される 3M-54 及び 3M-14 は 3M-54TE 及び 3M-14TE と称され、中国は未だ獲得していない。したがって中国が 3M-54E を獲得した後の YJ-18 は、明らかに同じファミリーのコピー製品であり、すでに 54E/TE、14E/TE も複製している。潜水艦発射及び水上艦発射対艦ミサイルを陸上攻撃用に発展させるのは各国にとって必然的趨勢である。C-802A も対地攻撃型を開発した。

ロシア軍の輸出型 3M-14E/TE と自軍用の 3M-14/T の最大の違いは射程である。後者は、大型の燃料タンクを装備しており、寸法的に長さは相当大である。ロシア及び西欧の軍事雑誌は、今回の IS への巡航ミサイル攻撃の前に 3M-14 の射程は少なくとも 2500 KM はあると説明していた。

中国が CJ-10A を開発した技術水準から見て、YJ-18 艦対艦ミサイルを基礎に、艦上発射型対地攻撃用巡航ミサイルを開発するのは困難ではない。

すなわち中国版の 3M-14 の開発であり、KDR は 052D に YJ-18 艦対艦ミサイルを搭載している各種の証拠を入手している。実際に中国の軍事雑誌記事を詳細に読み、連繫分析すると秘密でも何でも無い。KDR は、今年 YJ-18 の開発過程を詳細に分析した。全て公開資料を参照し得た結論は、一つのシリーズ、ミサイルファミリーの全てが複製であった。今日の中国軍事技術の開発状況を見れば、052D 型 DDG に陸上攻撃型の YJ-18 を速やかに配備するのは、困難とは思えない。

中国がもしシリアの IS を攻撃するとすれば、残る問題は、052 を何処に配置し対地ミサイル発射するかである。中国海軍は、ここ数年来インド洋及びアラビア海に入り、海賊対処任務を行ってきた。この海域の海況、気象条件には慣れている。しかし依然、多くの複雑な国際問題が存在する。中国海軍の巡航ミサイルの射程内で有効に発射するため、052D の発射区域で最も可能性の高い区域はペルシャ湾である。その場合、ホルムズ海峡に通る必要がある。そこから巡航ミサイルを発射する場合、イラン、イラクを通過する必要がある。ペルシャ湾からダマスカスまでの直線距離は 1600 乃至 1500 KM である。陸上攻撃型の YJ-18 の射程が 1500 乃至 2000 KM として計算すると、攻撃は可能である。或いはアデン湾、紅海に進入して攻撃するとなると、巡航ミサイルはサウジアラビア、ヨルダンを通過してシリアに届くことになる。射距離は 1000 KM である。

北斗 2 (BD-2) 航法衛星

BD-2 は武器誘導に使えるであろうか？ どの程度の範囲内なら運用可能なのか？ これは現在確認する方法が無い。なぜなら輸出型の中国製兵器は、未だ民用版の BD-2 誘導システムを使用していないからである。

今年 2 月、官側の報道によると：総参謀部は広西省で北斗航法衛星を利用した作戦運用演習を行い、その際北斗システムの成果を展示した。演練した科目は主として：ネットワーク指揮、精確な定位、遠距離情報伝送、戦場態勢共有等々であった。しかし官側が公開した BD-2 航法衛星の 2012 年時点でのサービス範囲は、カスピ海及びそれ以西は含まれていなかった。サービス範囲は、2020 年に全球規模にな

るようだ。

したがって控え目に見積もっても、BD-2 は、今後 5 年以内に全球規模になり、戦略兵器はミッドコースで BD-2 の誘導を受けることができるようになる。

現段階において、たとえ INS+民用版の GLONASS が終末誘導を行う場合でも、YJ-18、CJ-10 による陸上攻撃は良好な精度の下で発射することが出来る。当然ながら、中国軍は、自前の武器に GPS 誘導装置は利用していない（発射台は除く）。さもなくば初期のトマホークのように YJ-18 はミッドコースで地形追従技術を利用することも出来るが、準備作業は複雑困難である。

上記論述は、当然紙上の理論に過ぎない。実戦を考えた場合、解決すべき問題は多々ある。まず第一に最も重要なことは、信頼できる人間からの情報と技術情報である。攻撃目標が正しいかどうか？今回ロシアが相当精確な攻撃を行ったと見るならば、ロシアのシリア及びイラクの IS 組織に対する情報工作が相当精緻であったためだ。GRU とロシア対外情報局（元の KGB）は、シリア、イラン、或いはイラク情報機関の協力を得た可能性もある。ロシアの中東経営と胸に秘めた世界大戦略は一朝一夕に出来たものではない。

中国が真に参戦しようと思うならば、如何に適切な情報を掌握できるか？人からの情報を獲得した後、偵察衛星で確認する必要がある。デジタル衛星写真は終末段階の情景照合、ミッドコースでの地形照合誘導の基礎になる。そうでなければ巡航ミサイルの誘導は問題が生ずる。

複雑錯綜した国際情勢に対する北京の掌握の程度及び分析能力は、モスクワとは比較にならないほど低い。KDR 平可夫氏が中国の軍人、外交官と談話を行った印象は率直に言って次の通り：彼らは、台湾を知りたいことを強く希望しており、また台湾に関連する日米の外交及び軍事動向を知りたがっている。一方、彼らの外部世界を知ろうとする知識欲、知識掌握能力はロシア及び欧米の軍人、外交官と比べると、レベルは低い。

以上